日本一の夕陽 フォトコンテスト入賞作品

平成９年度 グランプリ作品

第１部／国内で撮影した「夕陽・夕景」

金賞

「峠の夕日」
楠本　弘児（和歌山県新宮市）
撮影場所／和歌山県本宮町

グランプリ

「真赤ダルマタ日」
星島　孝雄（岡山県倉敷市）
撮影場所／高知県宿毛市

銀賞（５点）

「台風のあと」
むらうちかつお（北海道八雲町）
撮影場所／北海道八雲町

「暮れる頃」
平山　弘（和歌山県田辺市）
撮影場所／和歌山県田辺市

「黄金の光の中で」
小松　孝文（大阪府枚方市）
撮影場所／大阪市城北大橋

「新舞子夕照」
井上　武（兵庫県姫路市）
撮影場所／兵庫県御津町

「連絡船にしき」
鈴木　力（東京都新島村）
撮影場所／伊豆七島新島港沖

第２部／市内で撮影した「留萌の良さ＝名所・イベント」

金賞

「浜中海水浴場の夕景」
坂井　盛二（港町1）

グランプリ

「落日岬」
渡辺　一夫（明元町6）

銀賞（５点）

「磯舟と漁師」
若井　正一（旭川市）

「暮れる頃」
塩谷　洋次（住之江町4）

「望洋落日」
福原　久之（末広町1）

「かもめもみている５時半の夕焼け」
佐藤　正志（旭町1）

「全速力」
坪井　博司（東神楽町）

展示会のおしらせ

平成11年[illegible]月1日から礼受の[illegible]資料館で1、2部の入賞作[illegible]の展示します（一[illegible]間を除く）。
また、平成11年6月23日～同年7月1日までの間、サッポロファクトリー内「コニカプラザ・サッポロ」で作品展を開催します。

○紙面の都合により、銀賞以上の作品について掲載しています。
○紙質等の事情により、実際の写真の色とは多少異なる場合があります。

平成９年度に「宇宙一の夕陽フォトコンテスト」と題して始まったこの企画。

平成10年度は日本一の夕陽として、国内で撮影した夕陽・夕景にこだわり募集をはじめたところ、応募人数４１３人、応募点数８０３点、作品の60パーセント以上が道外で撮影されたものでした。

第２部の市内で撮影した「留萌の良さ＝名所・イベント」には、応募人数41人、応募点数１３６点の作品が寄せられました。

審査員　秋山　亮二氏

1942年東京生まれ。1964年早稲田大学文学史学科卒業後、AP通信社、朝日新聞社を経て、現在フリーの写真家として活躍中。「アサヒカメラ」「日本カメラ」「CAPA」などのカメラ専門誌の審査員も務める。コニカ嘱託写真家。コニカフォトクラブ会長。

■第１部の作品全体の総評

夕陽を手がかりに美しい日本の光景を描こうとするこの留萌市主催のコンテストに、全国各地からすぐれた作品が多数応募されてきました。審査にあたった者として、これほど美しい光景が日本にあったのだと、目を見開かされる思いを抱きました。夕陽ということで、望遠または超望遠レンズで太陽そのものだけを狙った映像もかなりありましたが、天体（科学）写真としての価値はともかくとして、この全国コンテストの場では、そこに映像としての美を求めたいものです。写真はあくまでも今を描く表現手段です。クラシックな世界を描写しつつも、そこには現代に足をおいた作者からの力強いメッセージを期待したいのです。朝陽が新しい一日の開幕を告げて、期待を抱かせるイメージならば、夕陽は今日の平穏への感謝、そして新しい明日への希望を自ずから心深く抱かせるものでありましょう。センチメントだけに流されず、雄大な光景をしっかりと見守った写真家の作品を多数選ぶことができたのは嬉しいことでした。

■グランプリ「真赤ダルマタ日」の評

赤く染まった画面上部を飛行している影は鳥だろうか。トンボのようにも見えるのだが、このスケール大きな画面のなかでトンボがこれほどしっかりと写るはずもない。雲の壁を歌舞伎舞台の幔幕のように引かせ、その前で腰をドンと海面に据えた落日、それを見守るような黒々とした岩と、名残惜しげにまるで手を振るような松のシルエット。まさに一瞬の撮影だったにちがいないが、前景に意を用いることで、夕陽光景の醍醐味をじっくりと教えてくれる構成を持つ作品となった。重厚な全体の色配分も申し分ない。あきず（トンボの古名）が日本国の異称でもあったことを思い出しているが、海のかなたに思いを馳せた古代人たちもこのような景観を神秘の思いで見ていたのだろうか。